

岩手県田代遺跡調査報告

草 間 俊 一

A Report of the Excavation on the Prehistoric Site at

Tashiro, Kunohe Country, Iwate Prefecture

SHUNICHI KUSAMA

1 ま え が き

岩手県の県北地方の円筒土器を出土する遺跡を調査したい希望を年来もつていて、その機会もなく過ぎて来たが、たまたま本学農学部の笠原潤二郎先生の紹介で九戸村江刺家字滝谷の小井田与八郎氏を知り、調査の機会を得た。即ち昭和30年6月下旬笠原氏の案内で、小井田氏宅に3日間逗留し、江刺家附近の遺跡を踏査した。その際本遺跡付近一帯は、畑の表面に土器片が相当数多く散乱していて、調査に期待がもたれた上に、野辺地友吉氏庭先の畑の土をけずり取った断面に土器片の堆積層が見られたので、その部分だけでも調査したいと考えた。なお本遺跡は「石器時代地名表」にも載つて居り、古くから知られていたが、その内容について報告はされていなかった。

それで地主野辺地友吉氏に発掘調査の件を交渉したところ快諾されたので、翌31年春雪融け後の農耕に差支えない時期に調査することにして準備を進めた。その結果、宿所の件も小井田氏が引受けてくれ、その他の協力も約束されたので、4月10日より同14日までの5日間学生菅原弘太郎（現門崎小学校教諭）・伊藤正・金沢光孝の三君を補助員として調査を実施した。調査は期間も短かく、参加者も少なく、試掘の範囲に留まつたが、調査中は天候に恵まれて、予期以上の成果があった。殊に岩手県の円筒土器文化を知る上に重要な資料も多いので、こゝに調査の結果について報告する次第である。

この調査を発表するに当つて、宿所その他万端の世話になつた小井田与八郎氏、発掘を快諾された上調査に協力してくれた地主野辺地友吉氏同安吉氏父子、調査のいとぐちを作つて呉れた笠原助教授をはじめ江刺家中学校長田村哲郎氏・福岡高校教諭長岡善一郎氏・学生菅原弘太郎・伊藤正・金沢光孝の三君と伊保内寇君に謝意を表する次第である。なお多大の援助を与えて下さつた浅見学部長花房峻事務長に感謝する。

2 遺 跡

1 位置と現況

本遺跡は北上山地北端の九戸高原と折爪山陵に挟まれた、瀬月内川（八戸で海に注ぐ新井田川支流）の流域の狭長な河谷平地のはゞ中央部に位置し、葛巻から晴山に向つて北上する県道を、長興寺部落を過ぎて約2軒程行つた右側にある。鉄道からの便は、東北本線北福岡駅で下車し、そこより伊保内行きのバスに乗り、小峠で折爪山陵を越して石神田で下車し、山道を東北方に下つて600米程行つたところにある。行政区画は岩手県九戸郡九戸村大字江刺家第二地割126番地で、第二地割は通称田代と云われ、126番地附近は大屋敷と俗称されている。本遺跡は西方に南北に縦走する折爪山陵から東に向つて張り出している幾つかの洪積層の舌状台地の一つの先端部に当り、低い台地をなしている。台地は西方が次第に高くなつて山へつゞいて居り、東の方の台地の先端は一段下



第1図 遺跡附近, ○は発掘地点

つて瀬月内川の流域の地となり、水田が開かれている。南北に通ずる県道はこの舌状台地を切断している。この県道によつて切断された断面は、この台地の一番高い所では三米程ある。この県道によつて切断された丘陵の両側の畑の表面には、土器片が相当散乱して、遺物包含層をなしていることが推測されたが、今度はその一部分である野辺地友吉氏宅地内の畑のを調査したものである。

野辺地氏宅は舌状台地の先端に近く、北端にあり、台地の傾斜地を平らに整地して作つてあるため、宅の南側正面の庭先にある畑は庭より50程位高くなつている。西横の畑は南の方が庭より高く北の方は低くなつている。従つて県道より東へ20米程入つたところにある家に通ずる道は、県道より50程上つているが、なお畑の地表面より40程程下に掘り下げている。この家の前の畑や、道路の両側の畑は雑穀或いは蔬菜を作つている。

II 調査の状況

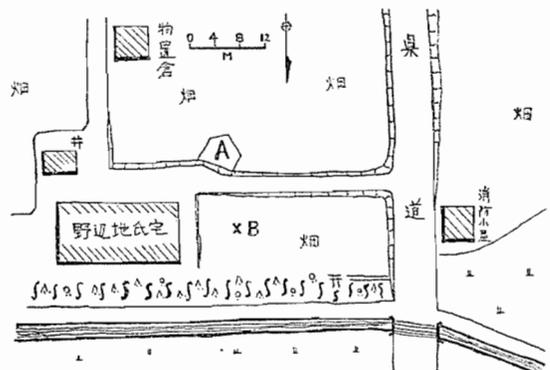
調査は4月10日より14日まで5日間、午前8時30分より午後5時まで、菅原・伊藤・金沢三君に小井田氏・伊保内君などの援助があつて進められた。春先のこととて風は相当強く砂ほこりを巻き上げていたが、天候には恵まれ調査は順調に進んだ。

調査地点は昨年畑の土を除去して新しい断面を見せている箇所、即ち野辺地氏宅の西南方に当る庭に接する畑の部分東西約3米、南北約3米の範囲を調査して、A地点とした。A地点の畑から道を隔て、北側の畑、即ち野辺地氏宅の西側の畑で、A地点から8米程の所に東西1米・南北2米のピットを掘り、B地点とした。両地点共連続した畑であつたものが、家に通ずる道路のために切断されているだけであつて、地層の状況は同一であつた。洪積層の舌状台地の上を約70~80程の沖積土が覆ふている。

この沖積土は三層に区分され、地表面より数えると、第一層は耕土で、地表面から25程位の深さまでである。第二層は25程~50程程までの深さのところ、黒褐色土層である。第三層はそれ以下80程位までの深さのところ30程の厚さの黄褐色土層である。その下は地盤のローム層となつている。

第一層は耕土のため、土器片は相当多いが、全く破片となり、完全な形のもの是一個も見られない。土器片の文様は、表面採集される破片の文様と同じで、大木8式、円筒上層式、円筒下層式の破片が混在している。

第二層は遺物包含層をなしている。上の方には大木8式土器の割合大きい破片も若干あるが、円筒土器系統の破片が多く、中には復原可能のものも出土している。この復原可能な土器が発見される30程~50程までの層になると、円筒式土器が押しつぶされて堆積し、殊にA地点では投げ込まれたのではないかとされる程乱雑に重なつていた。B地点では数は少ないが一つ一つが横に押しつぶされていて、原形を堆積出来る形で出土した。いずれにしても、この包含層から出土した土器は五坪足らずの所であるが、復原出来たものだ



第2図 調査地附近

けて20個を数え、その他大体の器形を形作れるものは7・8個を数え、土器片はリング箱7個に及んでいる。

第三層は黄褐色土層で、木炭の細粒も含まれていて、遺物が包含されている可能性も大きかったが、調査した範囲の所では発見することが出来なかつた。今後の調査では、恐らく遺物が発見されると思つている。

3 遺 物

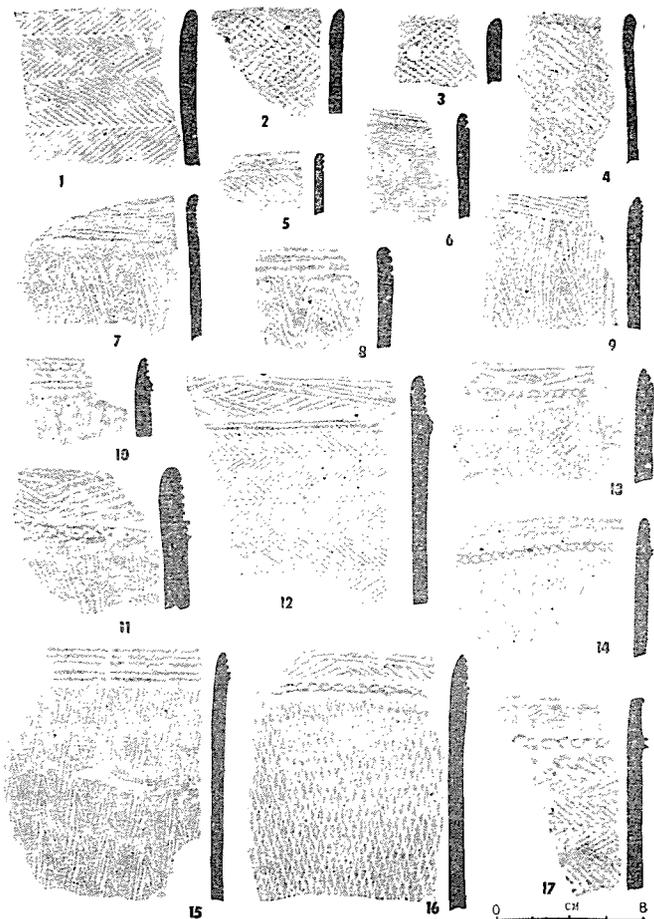
本遺跡より発掘された遺物は土器、石器と耳栓である。

1 土器 土器は図版第一図に示したような復原出来た土器20個を含む土器片は、リング箱7個分発掘された。

これらの土器は縄文式土器で、前期末から中期中頃に及ぶものである。その中でも、主なものは第二層下層から一括堆積して発掘された土器で、山内清男氏が円筒土器下層D式と命名したものである。次いで、主要なものは第二層上部と第一層中に包含されていた第5類とした土器で、円筒土器上層C式としても良いと考えている一形式の土器である。以下それらの土器を次の6種類に分類して述べる。

第一類土器 (図版第1図1~12・挿図第三・第四図) 第一類土器は次の第二類土器とは層位的に区別されず、第二層下部に一括堆積土器片として発掘されたもので、復原可能のものが最も多く、本遺跡の最も主要な形式の土器である。しかし第二類土器とは器形・文様の上から一応区別されるものである。即ち第一類土器は口径が底径より短いだけで、単純な下すぼまりの円筒形の土器であるが、第二類土器は頸部が内折して、口辺が外反し、肩部が外に張つた壺形に近い器形をするものもある土器である。第一類土器は文様の上から次の4式に分類される。

A式 (図版第1図1・2, 挿図第3図1~4) 円筒土器下層式に普通にある口辺部の帯状の文様帯がないものである。従つて頸部に突帯が周されてもいなく、口辺部から下胴部まで同一の縄文が施文されている。この文様には羽状縄文が多く、中には横走する結節文が混えられているものもある。胴部の文様に右傾斜行縄文のものもある(挿図第3図4)。この斜行縄文の土器片だけが、この形式の土器では胎土に繊維が含ま



第3図 第一類土器



第4図 第一類土器

れていず、雲母や細かい砂が多く混じっている。この式の土器には大形のもがなく、高さ30種以内で、中でも図版第1図1の土器は高さ13種の小形のものである。

B式 (図版第1図3~5, 挿図第3図5~9) 口辺部に口縁に沿うて帯状の文様帯があるが、その文様帯と胴部の文様部との境界の頸部に隆状した突帯をめぐらしてないものである。図版に示した復原出来た土器3個の外、破片も若干発掘されている。

口部の文様帯は図版に示したものはいずれも撚糸を二条或いは三条、四条と口縁に平行に整然と押しつけて居るが、その様なものばかりでなく、挿図第3図に示したように、右傾の斜行撚糸文を乱雑に押しつけたもの(9)、撚糸を稜のある棒状のものに巻きつけた縄文原体を押しつけて文様を施した

もの(6)や結節文を二条施文してあるもの(5)などさまざまである。

胴部の文様は木目状縄文が多い(図版第1図3.4, 挿図第3図7~9)が、右傾斜縄文や羽状縄文がある外、竹を削つて作った刷毛のようなもので器面を調整した感じのものもある(挿図第3図6)。

器形については、口縁はいずれも平縁で、底部は平底である。復原出来た土器はいずれも高さ20種前後の中形のものである。なおこの式の土器の器壁にはいずれも繊維が入っている。

C式 (図版第1図6・7, 挿図第3図10~17) 口辺部の文様帯と胴部の文様との境の頸部に隆起した突帯をめぐらしてあるものをこの式に入れた。突帯は余り太くも高くもないのに特色がある。

復原出来たものは図版に示した2個の外に3個あり、計5個である。

口縁部の文様は撚糸を押しつけたもの(図版第1図6・7, 挿図第3図12・13・16・17)、撚糸をコイル状に巻きつけた縄文原体を押しつけたもの(挿図第3図11・15)、箸状の丸い先端の尖つたもので突き刺したもの(10)や鋸歯状に連続山形文を施文したもの(14)など、その文様の種類は相当多くなつている。

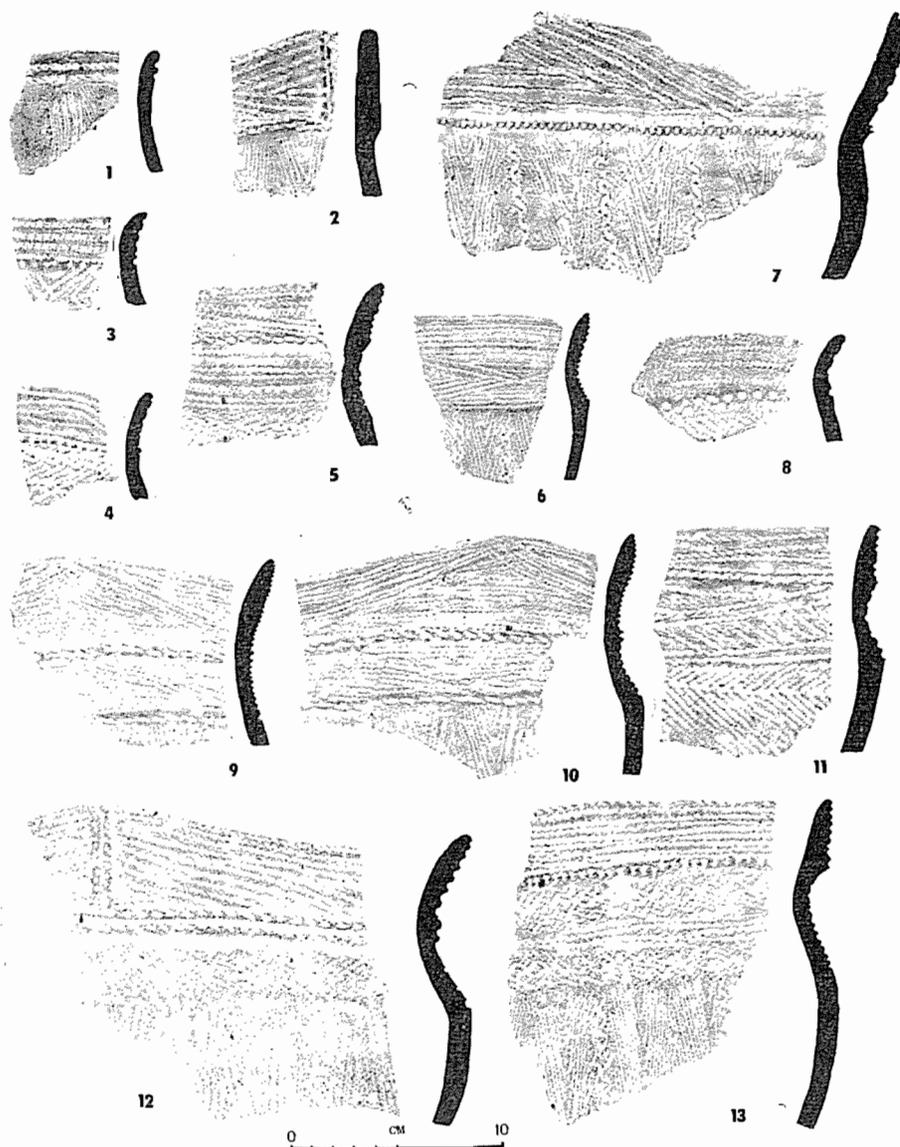
胴部の文様はB式同様木目状文が最も多いが、その他羽状縄文(挿図第3図12・17)や網縄文(16)があるが、網縄文の施文されたものはこの一片だけであつた。

頸部の突帯にはいずれも施文してあり、施文具は撚糸や縄文原体を用いたものや、細い笹竹や篋状工具を用いて斜の方向から突き刺したものである。

器形は平縁平底で、単純な円筒形のものが多いが、中には緩い波状縁をなすものもある(図版第1図6, 挿図第3図12)。器壁の中の繊維は挿図第3図10のものを除いて、全部のもの含入されている。

D式(図版第1図8~10・挿図第4図) この式の土器は次の第2類A式と共に本遺跡に最も多く、また本遺跡を特色付ける土器である。これは頸部に突帯のない点に於いてB式とは類似しているが、頸部の突帯のある部分に口辺部の文様帯と胴部の文様を区劃する施文をしているものである。その施文には棒や篋、竹管の先端を突き刺してあるものが普通であるが、その施文のない場合は心持ち隆起せしめた部分がつけてあるか、口辺部の文様帯の部分全体が厚くもり上つた感じになっている。云いかえれば頸部に隆起せる突帯に代る、何らかの工作をしているものである(挿図第4図11~13)。従つて中には突帯と見た方が良いのか、C式の突帯が細少のため何れとも判じ難いようなものもある。復原出来たものは図に示した3個の外1個あり、計4個である。

口辺部の文様帯の施文はC式と類似して居るが挿図第4図3の如き然糸を羽状に押しつけてあるのは変つている。胴部の文様はC式と同様木目状縄文が最も多く、その他は羽状縄文である。中で



第5図 第二類土器

も図版第1図10の土器は相当細かく施文されて居り木目状縄文の中間に二条の結帯文が施されている。

器形は平縁・平底の単純な円筒形であるが、緩い波状縁をなすものが若干ある。器壁内には繊維が含入されている。

第二類土器 (図版第1図11~14, 挿図第5図) 第一類土器と共に一括堆積遺物として発掘されたものであるが、器形・文様の上から相異が見れるものである。即ち第一類土器が単純な円筒形であるのに、この類の土器は頸部がくびれて内鬚し、口辺が外反しているのに特徴がある。この中でも、円筒形の基本形式がくずれているかによつて、A式・B式とC式に細分される。即ちA式は円筒形の基本形を全く失っていないが、B式は甕形に近似し、C式は漏斗状となつている。文様もA式は第一類土器の文様に類似するが、B式は口辺の文様帯が相当巾広くなつて、違つている。

A式 (図版第1図11~12, 挿図第5図1~6) 第一類土器の口辺部に文様帯のある土器の文様に類似している。頸部の突帯はあるものとなないものがあるが、突帯の有無による細分は一応しないことにした。突帯のないものでも、頸部に突刺文をめぐらしているものがあるのは第一類と同様である。器形は頸部がくびれて内鬚し、口辺が若干外反しているだけで、胴部も上胴部が幾分外に膨らんで、底部に向つてすぼまる程度で、円筒形の基本型を余り失っていない。口縁は平縁が多いが、緩い波状口縁をなすものも若干ある。器壁にはいずれも繊維が含入されている。

復原出来たものは図版に示した2個の外2個ある。第一類土器のB, C, Dの各式の中に入れて考えても差支えないと思われるものである。

B式 (図版第1図13・挿図第5図7~13) A式より頸部のくびれが著しいだけ、口辺の外反も著しくなる。肩部が角をなして胴部が円筒形をなすものである。口縁は破片で明らかでないものもあるが、殆んど全部が波状縁をなすのではないかとも考えられる。中でも図版に亦したものは波状の突起のある部分の頸部に楕円形の穴が開けられている。

文様は口縁から肩部までに及ぶ巾広い帯状文が施文され、胴部の文様と区別される。この帯状文の部分には紐状の突帯が一条或いは二条めぐらされているものがある外、撚糸文や縄文原体の圧痕文・篋の先端や竹管による突刺文・鋸歯状の連続山形文・結節文など、第一類土器の口辺文様帯に施された各種の文様が一個の土器に併用されている。胴部は第一類土器と同様木目状縄文が多いが、その外は羽状縄文である。

C式 (図版第1図14) この形式の土器は図版に示した復原出来た土器一個の外、余り破片がなかつたものである。破片が少ないので明らかでないが、挿図第5図の6もこの器形の破片であるかも知れない。図版に示した土器は第二層下部から堆積した土器と伴出したものである。

器形は円筒形の基本型を失つて、却つて大木6式に見る漏斗状の器形に類似している。文様を見ると円筒土器の文様の名残を留めているが、口辺部の文様帯は単純な三本の沈線を施してあるだけで、口縁部に紐状の突帯を張り付けているなど、新しい変化を示している。頸部には一条の突帯を張り付けて、その下は胴部の文様と一体となつている点はB式とも異なり、A式に類似している。胴部の文様は第一類・第二類の土器の文様と異り右傾単斜行縄文がまばらに浅く施文されている所に縦の方向に結節文が強く施されているのが目立つている。器壁内の繊維はなくなつている。

第三類土器 (図版第1図15, 図版第2図1~6) 円筒土器上層B式と命名されている形式の土器をこの中に入れることにした。図版第1図15に示し器形を推定せしめるものの外復原出来たものはなかつた。若干の破片は前記第一類・第二類土器と混在していたが、大部分は耕土や第二層上部から発掘された。図版第2図1の土器片は表面採集である。

器形は平縁もあるが(図版第1図15)、多くは四つの山形波状縁で、その部分の口辺は殊に外反

が著しい。胴部は幾分膨らみをもちながら底部に向つてすぼまる円筒形をしている。

文様は絡繩体の細い粘土を口辺部に張りつけて繁雑にして粗野な施文をし、粘土紐の間の器面には篋状工具の先端で突刺した文様を施してある。胴部は単斜行繩文となり、第一類・第二類土器に見る様な手の込んだ繩文が施されていない。

器壁内の繊維はなくなっているが、胎土に雲母や細い砂が入り、作りも粗雑で、脆弱な出来上りである。

この第三類土器に先行するものに円筒土器上層A式があるのが普通であるが、本遺跡にはそれと推定される土器は殆どなく、あつても第二類C式としたものと別ち難い点もあるので一応その形式の土器の文化は発達しなかつたものと考えたい。

第四類土器(図版第2図7~10)この類に入れた土器は復原は勿論、余り大きい破片も見当らなかつたので精細なことが判らないが、器面の繩文の地文の上に二条の平行沈線文を施したもの(7)や、口縁を重ね縁とした粘土を張り付けてあるものである(8~10)。県の中心部である盛岡付近では、繩文文化の中期初頭に見られる土器である。

本遺跡の出土土器では破片も小さいので器形も明らかでないこれらの土器はいずれも繊維が含まれて居らず、焼成も第三類土器に比すれば堅緻である。上に述べて来た円筒土器系統の文化から見れば異質の文化であることは否定出来ない。

第五類土器(図版第2図11~20, 図版第1図16)第二層上部から割合に多く発掘された外、次の第六類土器片とも相当混在している土器片で、第三類土器と第四類土器の両形式の文化が折衷されて出来たと考えられる一形式の土器群である。従つて円筒土器の系統から考えれば上層C式と命名すべきであるとも考えているが、器形の上から浅鉢形土器(図版第2図20)も作られている所を見ると、円筒土器上層C式とだけ云い切れない所もある。

円筒土器で云えば上層B式の粗野な繁雑をもつた終繩様の粘土紐を張り付けることがなくなつて、単純化されている。その点に於いて隆起状文は退化して来ているが、文様は洗練されて来ている。繁雑な粘土紐を張り付けず、部分的にその名残を留めながら、形の変化によつて効果を現らわさうとしている(図版第2図13, 14, 17)。図版第2図20の浅鉢形の土器の捺糸による懸垂文は盛岡のこの時期のものと同く同一である。図版第1図16の復原土器もこの形式の土器として、円筒土器系統の名残を残しながら、新しい文様を施してあるものとして注目すべきものである。

第六類土器(図版第2図21~26)大木8b式及びそれ以後の土器で、復原可能なものも1個出土している。器面には繩文の地文に渦巻文や懸垂文粘土紐を張り付けた隆起帯や篋状工具による沈線を以て描いてあるもので、その文様は盛岡及び県南地方出土のこの種の土器の文様と何ら変りないばかりか、焼成なども同じである。

この文様の土器は表土及び第二層上部から発掘されているが、場所によれば復原可能なものも多く発見されるのではないかと思われた。

II 石器 石器は挿図第6図・第7図に示した石篋・石鎌・石七・石槍などである。

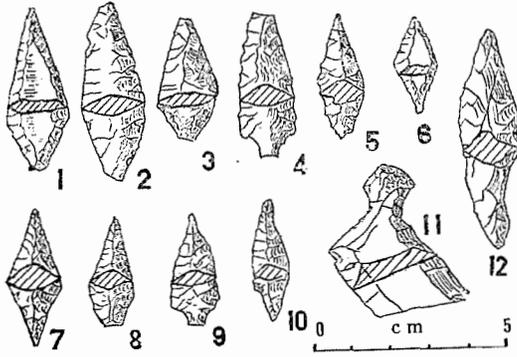
石篋は第7図1・2・3に図示したもので、いずれもチャートである。これらはいずれも第一類・第二類土器に伴出せるものである。加工はプレシユア・フレイキングによつて剥脱加工されたものであり、殊に3は原剝離面に特にノツチもチツピングも施されていない。果して石篋と稱するが適当かどうか明らかでないが、従来の名称を用いて置く。第7図4・5に示した楕円形の石器はなんと稱するが適当か明らかでないが、4は楕円形の自然石のように形もととのつて居るが、5は上下の先端部が擦り減らされている。殊に一方の端は著しく研磨痕が認められる。石皿の上で何か

1) 拙稿、岩手県戸遺跡調査概報(岩手大学学芸学部年報第10巻)。

をすりつぶしたのか、それとも石器を磨研すると石として用いたのか明らかでない。石材は両者共凝灰岩である。

第7図6は円形で上下に凹みのある一握り位の石である。恐らく火を鑽りおこす時に用いたものであろう。石材は石英安山岩である。

第6図 石器類 I

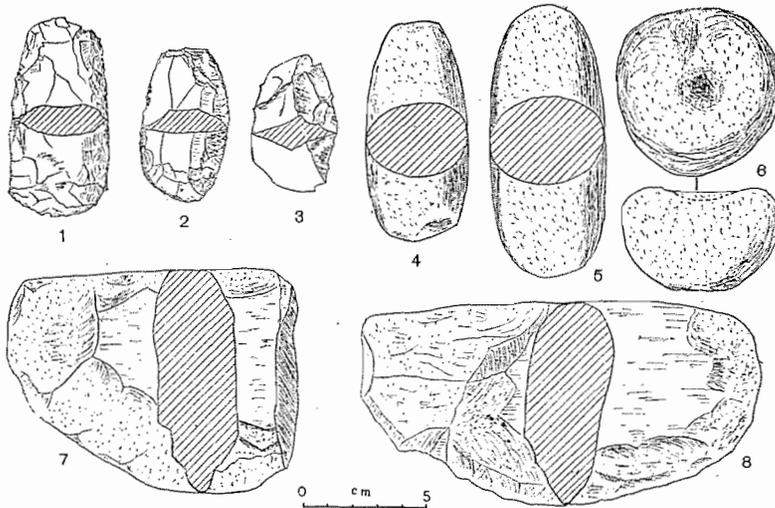


第7図7・8は半円形扁平の石器で、横刃形石斧と仮称している石器である。県内では縄文時代の前期末中期初頭の遺跡からしばしば発見されている。半円形をなす彎曲面に両側から打裂を施して刃をつけているが、反対側の直線の面には磨研痕がある。この石器は磨研痕のある面を使用を目的としたのか、彎曲面の刃をつけた方の使用を目的としたものであるか、問題となるが、第6図7・8はいずれも刃をつけた後に打石器として用いた痕が磨減痕として残っている点から考えると打石器として用いたもの

と考える方が正しいと思う。石材は礫質砂岩である。

石鏃(第6図1~10) 石鏃は表面採集まで入れて10個採集された。その中1~6までの6個が第一類・第二類土器に伴出したものであるが、他は表土除去の際に採集されたものである。下層より出土せるものは割合扁平であるが、余り相異はない。形は図で明らかな如く柳葉形が大部分であつて、有茎のものは2個あるにすぎず、形も余り精巧とは云えない。石材はすべてチャートである。

第7図 石器類 II



石七(第6図11) 石七は破片が1個あつただけで、縦形のものである。裏面は剝離面だけで、表面よりチップングによつて左右の両側に刃をつけてある。

石槍(第七図12) 石槍と云うが適当かどうか疑問の位半製品とも見られるものである。

III 耳栓

その他の遺物としては、長さ1.7握・径1握の中に孔の通してある短い管のような土製品が発掘された。一方の端は欠けているから、実の長さは2握位あつたと思われる。一応耳栓としたが単純

な粗雑な作りである。

4 結 び

以上田代遺跡の調査の経過とその出土遺物について概略を述べたが、今次調査によつて明らかになつた本遺跡の内容の中心は縄文前期末の円筒土器下層D式と云われるものである。この文化について既に青森県の資料を中心に山内清男氏によつて究明され、更に江坂輝彌氏が円筒下層C式の女館貝塚の遺跡につゞいて、円筒下層D式の遺跡を調査されたことを聞いている¹⁾が、岩手県内の資料について報告されたことがない。本遺跡は円筒土器下層式の場合に於いては割合に純粋な内容をもつていると考えられるので、その点その内容を掘り下げる資料となり得れば幸いである。

この円筒土器の文化も縄文文化の中期になると、この県北の地方でも県南方面の文化の影響を受けるようになり、異質な要素を混えていつたが、その当初は両者が混在折衷する關係にあつたのではないかと思われる。この点に於いて盛岡付近の文化の内容と類似している²⁾が、やや円筒文化の要素が強いではないかと思われる。それが大木8式になると全く新しい要素に代られて行く様に思われる。最後に石器の石材については工学部村井助教授の教示を受けたことを附記して感謝の意を表す。(1957.12.20)

本調査は昭和31年度文部省科学助金研究の一部である。

図 版 説 明

第 1 図 版

	高さ	口径	底径
1	第一類A式	(13 × 10 × 6)	
2	"	(23* × 17 ×)	
3	第一類B式	(19.8 × 13.7 × 8)	
4	"	(23.3 × 17.4 × 9.6)	
5	"	(23.7 × 19.2 × 10.5)	
6	第一類C式	(31 × 22 × 12.5)	
7	"	(23 × 15.7 × 9.5)	
8	第一類D式	(33 × 23.5 × 14)	
9	"	(34 × 27 × 19)	
10	"	(43 × 29.5 × 14)	
11	第二類A式	(25 × 15.5 × 8.5)	
12	"	(30 × 19 × 12)	
13	第二類B式	(33 × 24.5 × 14.5)	
14	" C式	(34.5 × 30 × 13)	
15	第三類	(15.2* × 12 ×)	
16	第五類	(20.5 × 14.5 × 7.5)	

第 2 図 版

1 ~ 6	第 三 類
7 ~ 10	第 四 類
11 ~ 20	第 五 類
21 ~ 26	第 六 類

但 ① 第1図版()内は(高さ×口径×底径)で、単位は厘である。

② 第1図版2と15の*印は残存部の高さ長さで、底径は明らかでない。

註 1 江坂輝彌「青森県女館貝塚調査報告」(石器時代第2号)

註 2 盛岡市付近のこの時期の土器については拙稿「盛岡市史先史期」に簡述してあるから参照して下さい。幸いである。



